

# 松永京子著 『北米先住民作家と〈核文学〉』——アポカリプスからサバイバンスへ

村上陽子

本書では、五人の北米先住民作家による核のナラティブが取り上げられている。扱われる作家と作品を概観するため、まず本書の章立てをあげておきたい（第一章から第六章の章題に付されたサブタイトルは省略した）。

## 序 章 〈核文学〉研究の再構築

第一章 サイモン・J・オーティーズの「フアイト・バック」

第二章 レスリー・マーモン・シルコウの進化する「儀式」

第三章 レスリー・マーモン・シルコウの『死者の暦』における

蛇の表象

第四章 シャーマン・アレクシーとウラン鉱山のポエティクス

第五章 マリルー・アウイアクタと原子の詩学

第六章 ジェラルド・ヴィゼナー『ヒロシマ・ブギ』における原

爆ナラティブの軌跡

終 章 〈核文学〉研究のこれから

序章では、「核兵器や核戦争が（世界の終わり）をもたらす可能性」、すなわち（ニュークリア・アポカリプス）が冷戦期を生きたアメリカ作家たちによって大量に描かれてきたこと、一九八〇年代から九〇年代前半にかけて核をめぐる言説やイメージの批評や分析が著しく発展してきたことがまず確認される。これらの研究や批評が〈核文学〉という文学的枠組みを形成していく一方で、原爆や核兵器の製造過程において環境的・文化的影響を受けてきた人々や土地の視点はその枠組みから取り落とされてきたと著者は指摘する。そして、このような〈核文学〉研究の傾向に対するオルタナティブを模索し、ポストコロニアリズム・エコクリティシズムの観点から〈核文学〉研究の枠組みを再構築するものとして本書が位置づけられる。

第一章では、一九六〇年代にウラン鉱山と精錬場で働いた経験をもとに書かれたオーティーズの詩集『フアイト・バック』——人々のために「土地のために』（*Fight Back: For the Sake of the People, For the Sake of the Land*, 1980）が取り上げられる。この

では、アメリカ南西部に集中する核産業がアコマ・プエブロ族の人々や土地に与えてきた影響を浮き彫りにするこの詩集の分析を通して、オーティースが先住民を「底辺」に置き続けたアメリカ社会のあり方を鋭く問い、労働者同士の連帯の可能性を探っていることが明らかにされる。

第二章、第三章ではシルコウの小説『儀式』(Ceremony, 1977)と、その十四年後に書かれた『死者の暦』(Almanac of the Dead, 1991)が取り上げられる。第二章では、まずラグーナ・プエブロの土地で展開されてきた実際の核の植民地主義が『儀式』というテキストにどう反映されているのかが考察される。その際、『儀式』が冷戦期に執筆され、ベトナム戦争直後に出版されるという時代背景を有していること、その時代背景が先住民とアジアのつながりとしてあらわれていることを著者は鋭く指摘している。その上で、『儀式』においてシルコウがグローバルな破壊の物語としてのアポカリプスのナラティヴをラグーナの物語体系へと回収し、アポカリプスのナラティヴを一時的に無効にする戦略を取っていることが示される。

第三章では、『死者の暦』において、五百年にわたる破壊と抑圧の歴史を終焉させようとする国際的な先住民の土地回復運動の蜂起の可能性が示され、同時にそれを阻止しようとする政府や軍との対立によってさらに多くの血が流れるかもしれないことがほのめかされていることが明らかにされていく。シルコウが先住民の「暦」によってそれらの運動を地球の循環エネルギーの一部に位置づけ直すとき、そこに終末的ヴィジョンから地球的ヴィジョンへの転化があらわれると著者は指摘している。

第四章では、アレクシーによるウラン鉱山のポエティクスが検証される。アレクシーの詩集『ブラック・ウイドウズの夏』(The Summer of Black Widows, 1996)は、スポケーン族の文化や歴史の文脈からウラン鉱山をめぐるポリテイクスを語り直し、抵抗とサバイバルの言説を形成していくものとなっている。部族にとって重要な意味を持つサーモンが死に絶えていくことと、それに伴う部族の絶望的な未来を「正しいゴーストダンス」によって再生のイメージへと転換させるアレクシーのポエティクスに、著者は(消えゆくインディアン)やユダヤ・キリスト教的なアポカリプスの踏襲とも取れる終末的な言説の踏襲に留まることのないアレクシーの抵抗を読み取っていく。

第五章では、アウイアクタの詩や散文が扱われる。著者は、アウイアクタが理論物理学者同様に原子をミステリアスで詩的なものと捉えていることを指摘する。しかし、アウイアクタはこの原子のナラティヴをチェロキー族の強制移住の歴史やアラチア山脈のナラティヴに接続させていく。著者はそこに、アウイアクタが原子の(本来の姿)に敬意を示しながら原子のナラティヴを問い直し続ける姿勢を見るのである。

第六章では、ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ―アトム57』(Hiroshima Bug!: Atom57, 2003)を通して、トランスパシフィックに広がる核のナラティヴの展開が見出される。その際、広島出身で自身も被爆者であった作家・大田洋子の原爆ナラティヴがヴィゼナーによって踏襲され、核の(犠牲者)を悲劇的なイメージに押し込めるイデオロギーの解体のために(ニュークリア・サバイバンス)のナラティヴが用いられていることが特に注目されて

いる。

終章では、(ニユークリア・アポカリプス)の文学として構築されてきた(核文学)という文学的枠組みに、ここまで検証されてきた北米先住民作家の(声)を響かせることによって発生した新たな領域、(ニユークリア・サバイバンス)が提示されることになる。

本書の最大の特徴は、(核文学)研究と(先住民文学)研究を領域横断的に接続させようとしている点にある。著者はまず、核の植民地主義のひずみを生きたことを強いられてきた北米先住民の歴史体験を示し、その歴史体験を個々の作家がいかに先住民の豊穡なナラティブによって語り直しているかを丁寧に考察していく。同時に著者は、(先住民文学)の想像力がアメリカ南西部に留まることなくメキシコやアフリカ、アジアなどに接続していることも提示している。それは、本書で取り上げられた北米先住民作家がそれらの場所に生きる人々との連帯を目指していることを示すだけではなく、核の植民地主義があまねく地球上を覆っていることを示すものでもある。地球上のさまざまな場所に点在する核の植民地主義とそれに抵抗する言説が結び合わされるとき、地球規模の言語空間としての(先住民文学)の展開が明らかになるのである。

たとえば、第二章で扱われたシルコウ『儀式』の主人公テイヨは、フィリピンのジャングルで(バターン死の行進)を体験してPTSDを患うことになったという。戦争によって先住民の人々や土地と引き離され、傷ついたテイヨは、ラグーナの伝統的儀式を体験することで回復していく。しかし、その過程においてテイ

ヨは自らの生まれ育ったラグーナ・エプロ留地が核の植民地主義によって変化を余儀なくされてきた事実に向き合っていくかなければならなかった。その際、テイヨは有刺鉄線に囲まれたウラン鉱山跡地にトリニティ・サイトやヘメス・マウンテンの奥の核施設、原爆が開発されたロス・アラモスとの連続性を見、フィリピンの戦場で殺された日本人の声がラグーナの声と重なった体験を想起していく。アメリカ南西部において見出された核が第二次世界大戦で使用された原爆、冷戦構造に基づくベトナム戦争の破壊につながっていくことを示すかのように、異なる場所における、異なる犠牲者の声が重ね合わされるのである。

また、第六章におけるヴィゼナー『ヒロシマ・ブギ——アトム57』の主人公ローニン・アイノコ・ブラウンは、大田洋子の『屍の街』の主人公の執筆状況を模倣して広島原爆を追体験していく。やがてローニンは、非核三原則を掲げながらもアメリカの核の傘を利用してきた日本の政治の欺瞞を糾弾し、平和記念公園の「平和の池」に火を放つ。著者は平和記念公園や資料館を舞台に「平和」を象徴する器物を破壊するローニンの行為に見せかけの「平和」を解体する意志を見出し、そのようなかたちで「平和」の欺瞞を告発しようとするヴィゼナーに『屍の街』以後の大田洋子と共鳴する姿勢を読み取っている。日本における原爆ナラティブが(先住民文学)の書き手によって踏襲され、拡張していく実践がここにあらわれているといえる。

このようなかたちで、(核文学)と(先住民文学)の交錯点を緊密に結び合わせ、さらに異なる場所／人々との接続をはかつていく著者の分析は、まさに(核文学)の枠組みの再構築という本

書の目的にかなう達成を示していると言える。

しかし一方で気にかかるのは、本書で扱われるほとんどのテクニクが実践している、核をめぐるマスターナラティブを先住民のナラティブへ回収していくという展開、すなわち先住民の文化や儀式、暦などを通して核の植民地主義がもたらすアポカリプスを回避していくという実践が一貫してポジティブに位置づけられているという点である。

たとえば、テイヨは、伝統的な儀式に新しい要素を加えた「進化する儀式」によってラグーナに破壊をもたらしてきた植民地主義を逆転させていく視点を獲得していき、アポカリプティックなナラティブをサブバイバルの物語へと転換させるストーリーテラーとして生成されていく。そして、『屍の街』の主人公のレトリックを踏襲したローニンはやがてアニシナベ族のナラティブに回収され、部族の文化や物語の枠組みのなかで再生を果たしていくことになる。

これらが核をめぐる支配的なナラティブを脱構築し、(ニュークリア・アポカリプス)を(ニュークリア・サブバイバンス)へと転化させていく可能性を持っていることに疑いの余地はない。しかしたとえば、先住民のなかにも核にまつわる施設や労働に対する立場や見解の違いがあったように、先住民文学も核の植民地主義に対する抵抗を打ち出すばかりではなく、それらとはからずとも共鳴してしまう側面を有しているかもしれない。本書でも、アレクシーが「絶望」を誇張したり、ステレオタイプを助長したりすることで、保留地に対する社会的責任を果たしていない」と批判されてきたこと、アウイアクタの原子観がインシュタインや

ボーアなど「原子の神秘やポエティクスに関心を寄せる科学者たちの言葉」によって支えられていることなどが触れられている。核をめぐる先住民のナラティブ自体に潜む問題があれば、それをより具体的に提示してもらいたかったと思う。

本書で取り上げられたテクニクには、核被害によって傷ついた者たちや倒れていく者たちが多く姿を見せている。未来への時間を生きられず、出来事を語り直す術も持たず、再生を果たすこともなかった存在に対していかなる言葉を差し向けることができるのか。これも、「核文学」の枠組みの再構築においては重要な課題であるように思える。そのような課題を考えようとするとき、一際鮮やかに立ち上がってくるのは第四章の最後で触れられる、アレクシーが描いたサーモンのゴーストダンスのイメージである。部族にとつて重要な意味を持つサーモンが死に、部族の命を次世代につなぐことも困難になるなか、正しいゴーストダンスが踊られることで失われた大量の命がいまを生きている人間の身体に宿って跳梁し、この世界を生き直す。そのような「生き残るはずのなかった物語の生き残り」こそ(ニュークリア・サブバイバンス)が出来させた現象であり、抵抗と希望の言説なのだと思う。

(二〇一九年五月三日 英宝社 三三八頁 三四〇〇円＋税)